

ぎのわんの 歴史・文化遺産を 歩く 其の14

「キャンペーン瑞慶覧」⑦

はじめに 今回は、キャンペーン瑞慶覧(西普天間住宅地区)で計画されていた工事に伴い市教育委員会が六月に実施した文化財の有無を確認する試掘調査の結果を速報として報告します。



調査地遠景(北方より○道跡確認地点)



昭和20年空中写真(○調査地周辺)



道跡検出状況(西方より)

調査の概要については、道八一号宜野湾北中城線(普天間)でい(り)に相当する、戦前の道跡の一部が確認されました。道跡は、イシジャーの西側、基地のフェンスから北側へ約十三m、深さ約六十cmの場所で確認されました。確認された道跡は長さ約六m、幅四〜四・五m、端の一部石灰岩を長方形に整えた縁石が置かれています。全体的には石灰岩の岩盤を平らに整え、両端に岩盤を掘り込んだ溝が確認されています。隣接する海軍病院建設

問合せ：文化課 ☎89314430

今回の調査では、県道八一号宜野湾北中城線(普天間)でい(り)に相当する、戦前の道跡の一部が確認されました。道跡は、イシジャーの西側、基地のフェンスから北側へ約十三m、深さ約六十cmの場所で確認されました。確認された道跡は長さ約六m、幅四〜四・五m、端の一部石灰岩を長方形に整えた縁石が置かれています。全体的には石灰岩の岩盤を平らに整え、両端に岩盤を掘り込んだ溝が確認されています。隣接する海軍病院建設に伴う調査では、幅約四六m、両端に石灰岩を長方形に整えた縁石を全体的に置き、道として使用する面を土や小石を入れて整え、縁石に平行する溝は土を掘って造られている道跡が確認されています。今回確認された道跡と異なる点もありますが、それは地形的な特徴の違いであり、基本的な特徴が共通していること、昭和二〇年の空中写真とも概ね位置が一致することから、戦前まで使用されていた道跡であると考えられます。

おわりに 小規模な調査範囲でしたが、道跡が残っていることが確認されました。形態的には、大正三年の郡道建設時に造られたとみなされますが、時代により道幅や造り方などに違いがあることも想定されます。近世(江戸時代)の地図には、この付近に道が通っていることが記載されていることから、道の位置は近世からあまり変化していないと考えられます。

サンゴ礁と魚たち

沖縄の観光イメージのひとつとして、エマルドグリーン(エメラルドグリーン)の海という景観があります。沖縄の島々を上空から眺めると、島を取り囲むように発達しているサンゴ礁が、神秘的な色合いと豊かな自然の恵みを人々に与えてきました。

宜野湾市には、東シナ海に面した集落として伊佐、大山、真志喜、宇地泊の4カ所があります。これらの地域のサンゴ礁は、人々の生活の糧となる多種多様な魚類や、貝類等の舞台でもありました。

今回は、そのような宜野湾市のサンゴ礁に生息する魚たちを、いくつかご紹介しましょう。

ベラ科のクギベラはサンゴ礁の中を素早く泳ぎ回り、長い口をサンゴの中に突っ込んで餌を捕まえます。体長が30cmぐらいで、成長すると口の先が伸びて先端はおちよぽ口になります。その頃のオスは緑の地色に、メスは体の後半が黒色、前半が白色に変化します。

次にブダイ科のイチモンジブダイは、口の先から目の下に一本の青色帯が縦走(じゆうそう)して、それが名前の由来だと考えられています。主にサンゴ礁の水深20〜30mぐらいに生息しています。沖縄ではブダイの仲間、イラブチャーの名で知られて

茶ぐわーゆんたく

123



います。その他には、体は短くて背が高い小型のスズメダイ類、黄色を主体とした目立つ色彩のチョウチョウオ類、方言名でミーバイと通称されているハタ類、沖縄独特の「追い込み漁」で捕獲される、フエダイ類などがあります。

現在、宜野湾市の海岸の大部分は埋め立てにより、ほとんどが人工海岸となっており、サンゴ礁は減少しています。しかし、宜野湾マリーナ周辺に広がる海岸は今でも、多くの魚類等の生命を育んでいます。

今年の海の日(7月21日)です。この機会に、身近な海の自然に触れて見ることができでしょうか。



クギベラ(ベラ科)



イチモンジブダイ(ブダイ科)

写真:「ぎのわん自然ガイド」より

「宜野湾市史」への問合せ
文化課 市史編集係(市立博物館内)
☎897019317